

ワサビ大尽

武山 智

去年四月の末、テレビ特集番組「八十八夜の頃」の取材で長野県は穂高の山麓に出かけたことがある。

残雪に輝く白銀の高嶺のもと、清流に洗われるワサビ田はさぞやよい題材になるだろう、という計算だった。日も傾きかける頃、農協事務の案内でオート三輪にゆられて行つた。レング畑の間を撮影機には有がたくないガタガタの農道がうねうねとのび、そのゆく手はるかに雑木林がみえてきた。

「あれがそうです」専務の指は雑木林のやや左手をさす。いくらか堤防のように小高くなつたところがそのワサビ田だという。

ワサビ田とは清流が常にワサビの根を洗うように設計された玉砂利の田、早い話が玉砂利の川原にワサビ苗を植えこんだようなもんだと考えていたが、ハテいつのまに丘の上に植えつけるようになったんだらう。と思つているとその全景がみえてきた。土橋の上に立つて見おろせば、中央さはるかかなたまで、曲りくねつてのびているのがワサビ田、みわたした範囲で五、六町はあるるか、その先は雑木林のかげにかくれてみえない。その田の中をかたり速さで清流が音を立て、いる。丘とみえたのは、このワサビ田をつくる為にはねのけた土砂の堆積、雑木林はその堤防の上

に植えられたものであつた。

「大したもんでしょ、二億円の財産ですからねえ。」

「ホウ、組合財産ですか？」
「いえ、個人のものです。ワサビ大尽のものですよ。」

なるほど二億円ともなればお大尽にちがいない。しかし、山林地主ならとも角、平坦地でそれ程財産をもつ者はあまり聞いたことがない。

「ほかの組合員の皆さんも夫々それ位の財産をおもちですか？」

「いえ、そんな、とても。」
「抜群の財産家であるらしい。専務についてゆくと、堤防の上の小屋から小柄な男が出てきた。色の浅黒いひきしまつた身体の手主である、目玉だけが異様に鋭い。」

「この農場の主任さんです。」

みると、その小柄な男のうしろにいつのまに出たきたのか、屈強な男たちが二、三人、作業衣にゴム長といういで立ちで護衛兵よろしく並んでいる。いさゝか気味が悪い。

「この主任さんは、戦争中少佐でね、戦軍隊の隊長してたんです。」

専務が声をひそめてさゝやく。終戦でブラブラしてたのを、お大尽に拾われたのだという。我々の先に立つて案内する彼は四七、八オセイカンそのもの、ソラダマシイである。

「この作業はどんな人達にたのんでいるんですか？」

「あゝ、女たちです。：：：オイ！お前たち、

に極えられたものであつた。

「大したもんでしょ、二億円の財産ですからねえ。」

「ホウ、組合財産ですか？」

「いえ、個人のものです。ワサビ大尽のものですよ。」

なるほど二億円ともなればお大尽にちがいない。しかし、山林地主ならとも角、平坦地でそれ程財産をもつ者はあまり聞いたことがない。

「放浪局の方なら今日の仕事を脱引して、さる。」

「オイ！には恐れ入つた。女たちと評定を、婦人たちは、ワサビ田の中にいた。白いカチーフで髪をつんだ娘さん、かちやんたちである。指揮官の命令に従つて素直に土手の上までよちの降り、我々の質問に答えてくれた。明日の撮影の下打合せである。」

「作業と休憩風景」あゝそれなら花をつんだらどうですか？あいつはうまいです。お茶うけにも絶好ですぞ。」

隊長君は中々親切である。ワサビの花をつんで、そのオヒタシで女たちにお茶をのませたら、：：：というのである。これはよろしい！早速準備しようおねがひした。

しかし、ワサビの花のオヒタシ：？いかなるものであるか、遺憾ながらおめにかゝたことがない。ワサビは大根と同様十字科の植物である。その花がくえぬ筈はない、だがどうやつて口に入れようというのであるか。又休憩どきにカンタンに作れるものであるか、メンドクさい加工を要するのであるか、喰い辛味の我々としては聞かぬわけにはゆかぬ。

「花はね、普通に摘めばいいの、摘んだ方が、根はふとるからね、そして花は葉と一諸にこうやつて水で洗つてね、一寸位にザクザク切つてしまひんだヨ。そしてそれをサベに入れて塩をバラバラとふつて、上から熱湯を注ぐんだヨ、え？すぐは食えないね。一晚おかなくてはダメだね。あとはカンブンとシヨーユかけて食べるんだヨ、ウマイヨ。」

「オイ！には恐れ入つた。女たちと評定を、婦人たちは、ワサビ田の中にいた。白いカチーフで髪をつんだ娘さん、かちやんたちである。指揮官の命令に従つて素直に土手の上までよちの降り、我々の質問に答えてくれた。明日の撮影の下打合せである。」

「作業と休憩風景」あゝそれなら花をつんだらどうですか？あいつはうまいです。お茶うけにも絶好ですぞ。」

隊長君は中々親切である。ワサビの花をつんで、そのオヒタシで女たちにお茶をのませたら、：：：というのである。これはよろしい！早速準備しようおねがひした。

しかし、ワサビの花のオヒタシ：？いかなるものであるか、遺憾ながらおめにかゝたことがない。ワサビは大根と同様十字科の植物である。その花がくえぬ筈はない、だがどうやつて口に入れようというのであるか。又休憩どきにカンタンに作れるものであるか、メンドクさい加工を要するのであるか、喰い辛味の我々としては聞かぬわけにはゆかぬ。

「花はね、普通に摘めばいいの、摘んだ方が、根はふとるからね、そして花は葉と一諸にこうやつて水で洗つてね、一寸位にザクザク切つてしまひんだヨ。そしてそれをサベに入れて塩をバラバラとふつて、上から熱湯を注ぐんだヨ、え？すぐは食えないね。一晚おかなくてはダメだね。あとはカンブンとシヨーユかけて食べるんだヨ、ウマイヨ。」

「オイ！には恐れ入つた。女たちと評定を、婦人たちは、ワサビ田の中にいた。白いカチーフで髪をつんだ娘さん、かちやんたちである。指揮官の命令に従つて素直に土手の上までよちの降り、我々の質問に答えてくれた。明日の撮影の下打合せである。」

「作業と休憩風景」あゝそれなら花をつんだらどうですか？あいつはうまいです。お茶うけにも絶好ですぞ。」

隊長君は中々親切である。ワサビの花をつんで、そのオヒタシで女たちにお茶をのませたら、：：：というのである。これはよろしい！早速準備しようおねがひした。

しかし、ワサビの花のオヒタシ：？いかなるものであるか、遺憾ながらおめにかゝたことがない。ワサビは大根と同様十字科の植物である。その花がくえぬ筈はない、だがどうやつて口に入れようというのであるか。又休憩どきにカンタンに作れるものであるか、メンドクさい加工を要するのであるか、喰い辛味の我々としては聞かぬわけにはゆかぬ。

「花はね、普通に摘めばいいの、摘んだ方が、根はふとるからね、そして花は葉と一諸にこうやつて水で洗つてね、一寸位にザクザク切つてしまひんだヨ。そしてそれをサベに入れて塩をバラバラとふつて、上から熱湯を注ぐんだヨ、え？すぐは食えないね。一晚おかなくてはダメだね。あとはカンブンとシヨーユかけて食べるんだヨ、ウマイヨ。」

「オイ！には恐れ入つた。女たちと評定を、婦人たちは、ワサビ田の中にいた。白いカチーフで髪をつんだ娘さん、かちやんたちである。指揮官の命令に従つて素直に土手の上までよちの降り、我々の質問に答えてくれた。明日の撮影の下打合せである。」

パアさんが教えてくれた。
ワサビ田は花ざかりだつた。大根のように
花は白く、長い茎ごと摘んでオヒタシにした
ら、ヒリ、と辛いことだろう。

お大尽の邸はいわゆる地主屋敷であつた。
だがそれには何か料理屋のおもむきがあつた。
白い土塀をめぐらした門を入ると、コンクリ
ートの道のかなたに広大な玄關がみえた。そ
の左手に新築まもない洋風の応接間がある。
玄關は玉石入りのたゞきに一枚板の式台。
正面に虎か何かの衝立があつて花を飾つてあ
る。

しばらくして婦人が出てきた。野良仕事を
していたらしく、帯に手拭をはさんでいる。
来意をつけると大急ぎでスリッパを奥の部
屋から出してきた。それを我々の足許に揃え
てくれる。彼女自身はハダシだ。それが大尽
夫人だつた。

応接室には豪華な置時計、ソファ、煙草セ
ットが置いてあつた。カメラマンと顔を見合
わせていると、ビタビタと素足の音がした。
「ヤア！」と云いながら大尽が現われた。四〇
位のイガ栗坊主、フチなしめがねに兵隊シャ
ツ、堂々たる体軀の持主である。町会議員と
いうだけあつて口調までが国会などできかれ
る、あの調子だ。

「あゝ東京からですか、ワシもね、下北沢
によくいきます。別荘があるんでネ」
とうとうとしやべり立てた。彼には何人か
の男の子があること、長男が別荘から早
大に通つていること、その子が高校時代にか

に秀才とうたわれたか、又現在もその名にふ
さわしい成績をとつているかということ、自
分は月に何回別荘から赤坂、築地に通う
かということ、いかに東京の料理屋がみすぼ
らしいかと、いうこと etc.:

ビールがなくなると、彼はボンボンと手を
叩いた。するとドアが開いて、かよい盆にビ
ールをのせて女の児が現われた。ハナをす
り上げながら「ハイとうちゃん」と云つた。
これ又、泥のついた素足である。父親はお河
童の頭をなでながら今度は娘をほめそやした。
令嬢はお大尽のソファに片膝をかけながら、
まわりの客を珍らしめげに眺める。

そのうしろに油絵があつた。見廻すと、四
つの壁に四枚以上の額がかけられている。画
材は自然と人物。

「町でお買いになつたんですか？」
「ア、展覧会でね、安かつたですヨ」彼
は深呼吸する。

油絵は稚拙なものばかりだつたが、目立つ
点に於ては名作にヒケをとるまいと思われた。
「ときに、こういうのはどうですか？」

お大尽の指は彼の背後にあるものを指した。
鬼瓦である。赤い絹布団の上にドッシリと鎮
座しましたその面には、えたいのしれない
ものがゴチャゴチャと刻まれている。

「よくみて下さい。七福神ですよ」云われ
てみると確かにそうだ。アタマの長い、よ
くフトつたの、その他モロモロが三角形のワ
クの中でヒシめき合つている。
どうです。立派なものでしょう。芸術作品

ですよ、註文して作らせたくんですがね、ほか
にはちよつとありませんヨ」

「これは盛き物ですか？」
「いや、この応接間の屋根にのせるんです。
こともなげに彼は答えた。私は鬼瓦の人物と
額ブチの中の婦人がニヤリと笑つたような気
がした。

彼は二代目。父親が関東大震災のとき、ワ
サビを東京に背負つていつて一夜にして産を
なしたという。

その後彼には違わない。しかし八十八夜の
頃ともなれば、白いワサビの花のヒリ、とし
た味を思い出すのである。